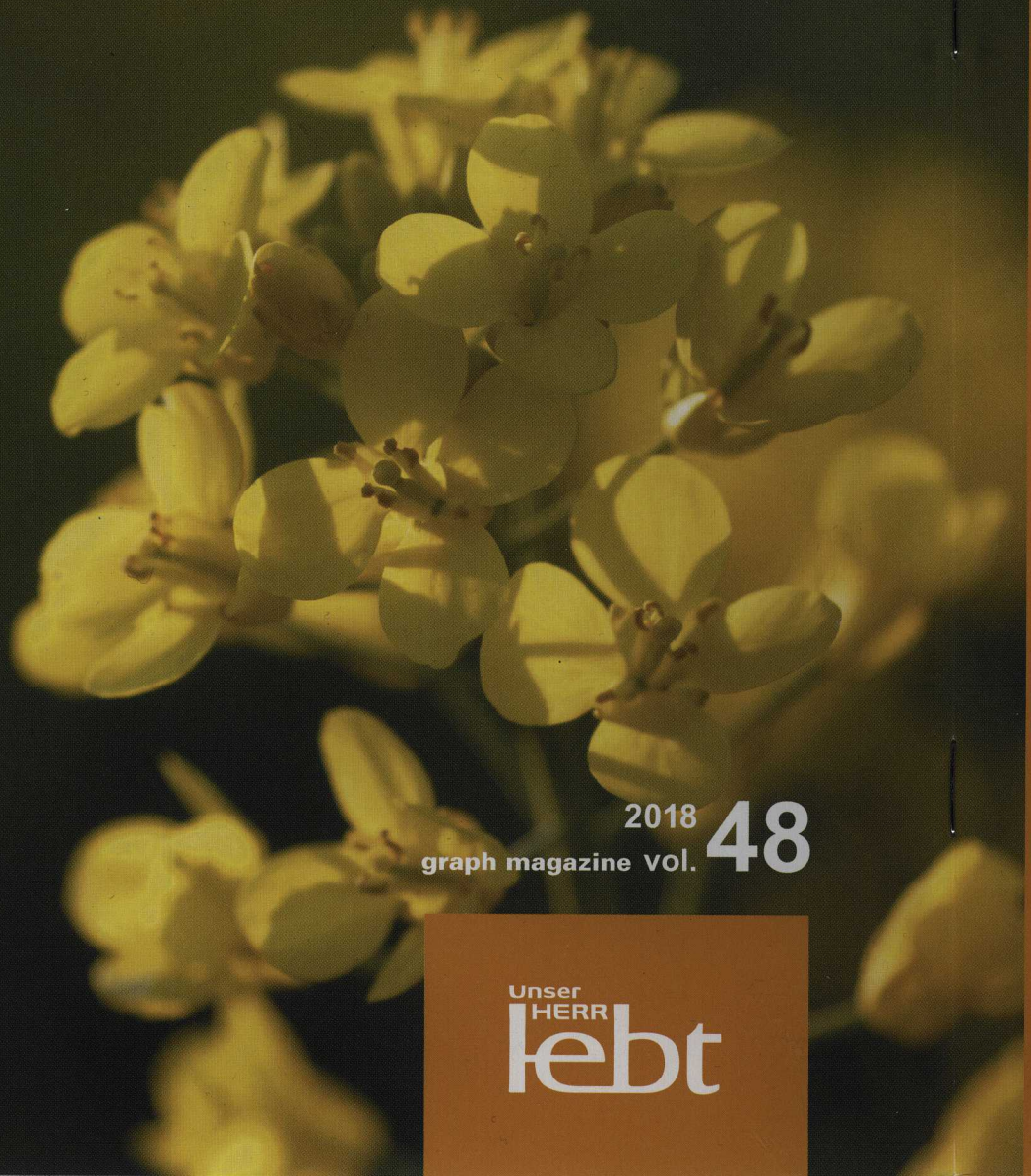
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2018 graph magazine vol. 48

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 48　定価100円（税込み）

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

メッセージ

4 からし種のたとえ(2) ゴットホルド・ベック

15 十字架への道 黒田禮吉

10人の証し

24 神がこのことをされたのだ 宇田川ゆかり

33 主は私の羊飼い 飯島未穂

41 あふれるばかりの主の恵み 喜屋武昌信

48 主の愛に包まれて 喜屋武信子

53 平安をいただく恵み 藤川保子

61 朝ごとに新しい主の恵み 藤川尚子

71 主は与え、主は取られる 福島直子

76 それがあなたに何のかかわりがありますか
(ヨハネの福音書 21章22節) 丸山明子

80 主を喜ぶことは、あなたがたの力 江藤絵里

87 信仰に歩む道は決して散歩道ではありません 孫 智華

からし種のたとえ(2)

ゴットホルド・ベック

また言われた。「神の国は、どのようなものと言えばよいでしょう。何にたとえたらよいでしょう。それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときには、地に蒔かれる種の中で、一番小さいのですが、それが蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。」

イエスは、このように多くのたとえで、彼らの聞く力に応じて、みことばを話された。たとえによらないで話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちにだけは、すべてのことを解き明かされた。（マルコ　4・30〜34）

前回、私たちはからし種のたとえを通して二つの点、第一に「神の国とはいったい何か」、第二に「神の国は現在どのような現れ方を示しているか」について考えてみました。今回は、第三番目として「神の国は将来どのように実現されるのか」について短くご一緒に考えてみたいと思います。

1神の国は将来どのように実現されるのか

始めに蒔かれた種は、確かにわずかで小さな人数でした。けれども五旬節の日には三千人が一度に救われ、それから間もなく五百人以上の人々が主に導かれ救われました。イエス様が迫害され、信者が迫害される時には、教会は正常な、また堅実な成長を示していました。

ところがその後、キリスト教が政治的に公認されることによって、教会は異常な成長を遂げるようになりました。大勢の人々が、社会的な地位を得るために、いわゆるキリスト教に改宗したのです。信者の数から見れば、「キリスト教」は大きな成長を遂げました。しかし、霊的な力はまったく失われてしまいました。いわゆる「キリスト教」は、今では人々が本当の救いに導かれるための大きな躓きの石になってしまっています。

この悲しむべき「キリスト教」の発展の原因は、神の国が人間の力によって建設されるという、間違った考え方にあります。神の国はこの地上にやがて必ず実現しますが、人間の手によって建設されるものではありません。イエス様が再び、この地上に来られることによってのみ、もたらされるものです。

2裁かれるもの

神の国の特徴とは、どういうものでしょうか。それは神の正義と神の平和が支配するところです。しかし、この正義と平和の支配が実現する前に、神の裁きが行われます。この裁きの象徴として、旧約時代のバビロンの王ネブカデネザルを見ることができます。ある日ネブカデネザル王は、寝床で幻を見るのですが、幻では非常に高い木が地の中央にありました。ダニエル書4章に次のように記されています。

その木は生長して強くなり、その高さは天に届いて、地の果てのどこからもそれが見えた。葉は美しく、実も豊かで、それにはすべてのものの食糧があった。その下では野の獣がいこい、その枝には空の鳥が住み、すべての肉なるものはそれによって養われた。

（ダニエル　4・11〜12）

ところが、この大きく成長した木は聖なる者の命令によって切り倒され、根株だけを残して滅ぼされました。ダニエル書の続きを読みましょう。

その木を切り倒し、枝を切り払え。その葉を振り落

とし、実を投げ散らせ。獣をその下から、鳥をその枝から追い払え。ただし、その根株を地に残し、これに鉄と青銅の鎖をかけて、野の若草の中に置き、天の露にぬれさせて、地の草を獣と分け合うようにせよ。

この宣言は見張りの者たちの布告によるもの、この決定は聖なる者たちの命令によるものだ。それは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最もへりくだった者をその上に立てることを、生ける者が知るためである。

（ダニエル　4・14〜15、17）

主なる神は、ネブカデネザル王の高慢をご存知であり、大きく成長した木を切り倒すようにして王をお裁きになりました。ちょうどこのように、将来、主は宗教としての「キリスト教」をお裁きになりますが、主が裁きをお下しになるまでは「キリスト教」はさらにどんどんと成長していくことでしょう。この発展は悪魔の業です。この世的な権力を持ったキリスト教会は、黙示録の中で「大淫婦」になぞらえられています。黙示録17章を見てみましょう。

また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「ここに来なさい。大水の上にすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。地の王たちは、この女と不品行を行ない、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。」

それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手に持っていた。その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン。」という名であった。

そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人

たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見たとき、非常に驚いた。すると、御使いは私にこう言った。「なぜ驚くのですか。私は、あなたに、この女の秘義と、この女を乗せた、七つの頭と十本の角とを持つ獣の秘義とを話してあげましょう。」　（黙示録　17・1〜7）

黙示録19章には、この大淫婦が裁かれることによって、大群衆が主をほめたたえることが記されています。

この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。神のさばきは真実で、正しいからである。神は不品行によって地を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」

（黙示録　19・1〜2）

このような裁きを経た後に、神の国がこの地上で実現されるのです。十字架上で死なれ、復活して昇天されたイエス様は、もう一度この地上にやって来られ、エルサレムにご自身の都をお造りになります。この時、主である神に敵対するものは何一つとして存在せず、不自然な成長を遂げるものもありません。

3 世界の中心となるユダヤ民族

そして、ユダヤ民族はちょうど一粒のからし種のように、世界の民族の中心になります。今日に至るまでユダヤ人は、少数民族であり、多くの人々から忌み嫌われ、さげすまれていますけれども、このユダヤ人がすべての民族を祝福するようになると、聖書に記されています。エゼキエル書17章には、象徴的に次のように書かれています。

神である主はこう仰せられる。「わたしは、高い杉のこずえを取り、そのうちから、柔らかい若枝の先を摘み取り、わたしはみずからそれを、高くてりっぱな山に植える。わたしがそれをイスラエルの高い山に植えると、それは枝を伸ばし、実を結び、みごとな杉の木となり、その

下にはあらゆる種類の鳥が住みつき、その枝の陰に宿る。

このとき、野のすべての木は、主であるわたしが、高い木を低くし、低い木を高くし、緑の木を枯らし、枯れ木に芽を出させることを知るようになる。主であるわたしが語り、わたしが行なう。」（エゼキエル　17・22〜24）

似た内容が、具体的にゼカリヤ書に書かれています。

万軍の主はこう仰せられる。「再び、国々の民と多くの町々の住民がやって来る。一つの町の住民は他の町の住民のところへ行き、『さあ、行って、主の恵みを請い、万軍の主を尋ね求めよう。私も行こう。』と言う。多くの国々の民、強い国々がエルサレムで万軍の主を尋ね求め、主の恵みを請うために来よう。」

万軍の主はこう仰せられる。「その日には、外国語を話すあらゆる民のうちの十人が、ひとりのユダヤ人のすそを堅くつかみ、『私たちもあなたがたといっしょに行きたい。神があなたがたとともにおられる、と聞いたからだ。』と言う。」（ゼカリヤ　8・20〜23）

また、イエス様もユダヤ人についてサマリヤの女にこう話されています。

救いはユダヤ人から出るのですから、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。（ヨハネ　4・22）

このように、世界の中心はユダヤ人になり、そのユダヤ人をイエス様が支配するようになります。そして、イエス様とともに、ユダヤ人は全世界を支配するようになります。

イエス様は、今はこの世の多くの人々からさげすまれています。またイエス様を信じる真の信者たちも同じです。しかし、イエス様はまもなく再び、この地上に権威と御力を持って来られ、やがて真の信者たちもイエス様とともに支配する者になります。

4 主のご目的

それではなぜイエス様は、たとえでお話になったのでしょうか。それは、そうしなければ人々がイエス様のおことばに耳を傾けようとはしなかったからです。もしイエス様が、ご自分のご目的をはっきり示し「わたしは良い種であり、わたしは人々のために命を捨て、それによって救いの道を開く」と語られ、「あなた方は、踏み固められた道の土のように頑なな者だ。そして、信心深そうな顔をしておりながら、本当はわたしの神を知らない者であり、裁きの時には、一人として神から報いを受けることができないであろう」などと、あからさまにお語りになったとしたら、人々は主のことばに一言も耳を傾けようとしなかったでしょう。そればかりか、怒り狂ってイエス様を亡き者にしようとしたに違いありません。たとえでお語りになることによって、イエス様は人々が恵みに与る道を備えてくださり、悔い改める機会をお与えになってくださったのです。

からし種のたとえ（2）

人々が真理に耳を貸すことを望まなかったので、イエス様は彼らにたとえ話でお語りになられましたが、一方、弟子達に対しては、すべてを明らかにお語りになられました。それは、彼らが真理に対して心を開いており、悔い改める心の用意があったからです。今日の世の中では、神が望んでおられる真の教会は人々に望まれておらず、神の望んでおられない、地上のパラダイスが人々に望まれているのではないでしょうか。真の教会は、いつの世にあっても、目立たない小さな群れです。けれども、そこにはイエス様を個人的に知っており、救いの確信を持つ人々がいます。

イエス様は「わたしは・・・わたしの教会を建てます。」（マタイ　16・18）と約束してくださいました。今日でもなお、これが主のご目的です。つまり、イエス様は人々を悔い改めに導き、信仰を与え、人々が従順に主の導きに従うことを望んでおられます。この目的をわきまえない人は、悪魔に奉仕しているのです。多くの人々は、この主のご目的を望まずに、地上のパラダイスを築

くことを望んでいます。多くの政治家や革命家、思想家たち、また宗教としての「キリスト教」を信じているような人々は、このパラダイスを目指しています。

人間の力でパラダイスを実現しようとする試みは、必ず失敗に終わります。ドイツのアドルフ・ヒットラーは、彼の第三帝国が千年間続くと語ったのですが、実際には十二年間で終わってしまいました。人間の力でパラダイスを実現しようとする人は、主なる神に敵対する者であり、悪魔の手下として働く者です。

主なる神のご目的は、真の教会をこの地上に建設することです。新しく御霊とみことばによって生まれた者は、誰でも真の教会に属しています。イエス様が再び地上に戻って来られるまでに、悪はますます悪に進み、善はますます善に進むようになります。こうして、善と悪が成熟した時に、イエス様は再び来られます。悪の成熟は、権力、名誉、財産などを求め続けることによって達成され、善の成熟は、信じる者がイエス様によりいっそう似た者へと変えられていくことによって達成されます。そのゴールは「栄光の教会」（エペソ 5・27）であると書かれています。

私たちは悪から自分自身を聖別することが大切です。聖書がそう教えています。信じる者は、異端の教えをもった宗教家と交わりを持ってはいけない、彼らから離れなさい、彼らに挨拶もしてはいけないと語っています。私たちのような「キリスト集会」のグループは、このようにして生まれました。信者が、聖書に書かれていることと、いわゆる「教会」の教えとの違いに気づき、聖書の語っている事柄を実際に生活したいと思ったのです。それで「教会」から出ざるを得なかったのです。今日、世界中どこの国にもこのような「集会」があります。

このような「集会」の人々は、牧師制度、会員制度を否定しており、組織されたキリスト教、またいわゆる既成教会との組織的な連携を持つこともありえません。このような態度をとる真のキリスト者たちは、使徒の時代から今日に至るまで、常に存在してきました。またこのような態度をとるキリスト者たちは、いつの時代にも、激しい迫害にさらされました。彼らはいつでも組織されたキリスト教、またいわゆる既成教会から迫害されたのです。

5 五旬節から神の国まで

五旬節の日から信者が天に引き上げられる携挙の時、つまりイエス様の空中再臨までが、いわゆる「聖霊の時代」であり、主イエス様のみからだなる教会が建て上げられる時代です。聖霊が主を信じる人々の心の中に住んでくださることによって、それらの人々の集いが集会になります。そして、イエス様が空中再臨され、主イエス様のみからだなる集会が引き上げられる時、言うまでもなく聖霊もともに引き上げられます。

聖霊が天に引き上げられると、この世では悪霊が思うままに自分の力を働かせることになります。この時代は長くは続かず、その期間は七年間ですが、地上を偽預言者と偽キリストが支配し、特にユダヤ民族にとって過酷な試練の時になります。

この七年の期間が終わって、イエス様がこの地上に戻って来られる時、ユダヤ民族を迫害してきた他の民族は、ことごとく裁かれます。それから神の国が始まります。この神の国は千年間続き、平和と調和が支配します。この神の国には、もはや戦争のための武器はありません。イザヤ書は次のように預言しています。

> 主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。
>
> （イザヤ　2・4）

6 小さな群れ

ところで、神の国は将来のことだけを言っているのではなく、今日すでにもたらされているということを、聖書から学ぶことができます。パウロはローマ人への手紙の中でこう書いています。

なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。（ローマ　14・17）

神の国の特徴は、義と平和と喜びです。イエス様を受け入れた人々は、そこに神の国を体験しています。新しく生まれ変わった人々の交わりの中に、神の国はすでに実現されているのです。つまり新しく生まれ変わった人々は、義と平和と本当の喜びを持っています。イエス様もおっしゃっておられます。

神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。「そら、ここにある。」とか、「あそこにある。」とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。（ルカ　17・20〜21）

神の国は、聖霊によって信者の心の中にもたらされます。聖書は語っています。

何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。（ルカ　12・31〜32）

ここで「小さな群れ」という表現が使われていますが、これは聖霊によって生まれ変わった真の信者の群れを示しています。ここには神の国がすでに実現されています。エペソの聖徒たちも、イエス・キリストにあって、神の国を体験していました。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。（エペソ　2・1〜6）

コロサイにいる聖徒たちも、御子のうちにあって神の国の実際を知っていました。

また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。（コロサイ　1・12〜14）

それでは、私たちはこれらの事を自分自身で実際に体験しているのでしょうか。私たちはみことばのように、暗やみの圧制から救い出されて、御子のご支配の中に移されているのでしょうか。

人間は、悪魔の支配下にあるか、イエス様の支配下にあるかのどちらかです。自分自身の罪を認め、イエス様を自分の救い主として受け入れ、イエス様に従って行こうと心の用意ができている人々は、今日すでに神の国を体験しているのです。

まもなくイエス様は、ご自分に属する者を引き上げるために来られます。この地上に最も熾烈な患難、苦難の時代が到来する時、天では小羊イエス様と花嫁である教会の信者たちとの婚礼が行われるのです。

イエス様は、神の国の確信をお持ちでない方に、きょう、救いの確信をお与えになりたいと思っておられま

からし種のたとえ（2）

す。主は、ご自分のもとに来る者に、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」（ヘブル 13・5）とおっしゃってくださいました。この約束された真理に与かるために、イエス様の御許にいらっしゃいませんか。主は、待っておられます。

十字架への道

黒田 禮吉

悲しみの道

エルサレムに「ヴィア・ドロローサ」と呼ばれる道があります。ラテン語で「苦難の道」という意味だそうです。実は、この道が、二千年前イエス様が十字架を背負って、カルバリの丘へと歩まれた道だと言われています。この十字架への道は、まさに「悲しみの道」でありました。

大ぜいの民衆やイエスのことを嘆き悲しむ女たちの群れが、イエスのあとについて行った。しかしイエスは、女たちのほうに向いて、こう言われた。「エルサレムの娘たち。わたしのことで泣いてはいけない。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのことのために泣きなさい。なぜなら人々が、『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は、幸いだ。』と言う日が来るのですから。（ルカ 23・27～29）

ルカの福音書には、イエス様のいたわしい姿を見て、嘆き悲しんだ女たちがいたと書かれています。けれども、イエス様は、女たちに、「エルサレムの娘たち。わたしのことで泣いてはいけない。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのことのために泣きなさい。」と言われました。これは、自分自身が神の裁きをまぬがれ得ない存在であることを知るようにとの意味でありましょう。そして、エルサレムがやがてローマ軍に包囲される日のことを

預言されたものと言われています。

イエス様の十字架刑は過越の祭のときに行われました。イエス様の十字架を悲しんだ人がいた一方、恐らく、大勢の人々が、過越の祭をそっちのけにし、この十字架刑を見に集まり、怖いもの見たさで楽しんだのではないでしょうか。傷ついたからだで十字架を背負って歩まれた神の御子の「悲しみの道」さえも、もの珍しいものを見て楽しむところ、それをひと儲けする機会にしてしまう、人間の罪深さを思わされます。イエス様の悲しみは、ゲッセマネの園ですでに始まっていました。

それから、ペテロとゼベダイの子ふたりとをいっしょに連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、わたしといっしょに目をさましていなさい。」それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください。」（マタイ　26・37〜39）

イエス様は悲しみもだえ始められ、弟子たちに「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。」と語っておられます。このイエス様の「悲しみ」というのは、一体何であったのでしょうか。それは、志（こころざし）半（なか）ばで殉教しなければならない無念さではありません。弟子たちに裏切られたくやしさ、人々から受けるののしりに対する怒り、また、残酷な十字架刑への恐れのどれでもありません。イエス様は、アダム以来、人々が犯してきた罪を悲しまれたのではないでしょうか。

主イエス様は現代に生きる私たちにも語りかけておられます。それは、私たちが、イエス様の十字架の苦しみの姿を頭に思い描き、エルサレムの娘たちのように、ただ感傷的に涙を流すためではありません。神の御子を苦しめ、死に追いやったのは、実に私たち一人ひとりであり、その罪の恐ろしさを悲しむようにと教えておられるのではないでしょうか。そして、何よりも人々の無関心を嘆き憂いておられるのではないでしょうか。ですから、私たちは心から自分の罪を悲しみ、熱心に悔い改め、赦しを求める必要があります。罪を避け、罪から離れ、清さを求めるべきです。イエス様の苦しみや悲しみを感情的に思うだけでなく、本当に悲しむべき、私たち自身の罪を悲しむ者でありたいと思います。

喜びへの道

イエス様の歩まれた十字架への道は、このように「悲しみの道」でした。しかし、驚くべきことに、それは同時に「喜びへの道」でした。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

（ヘブル　12・2）

イエス様はどうしてはずかしめを耐え十字架を忍ぶことができたのでしょうか。何故なら、ご自分の前に喜びがあったからです。この「ご自分の前に置かれた喜び」とは、何でありましょうか。それは、十字架の後によみがえり、天に昇り、神の御座の右に着くその喜びではないでしょうか。イエス様はこう祈られました。

あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。

（ヨハネ　17・4〜5）

わたしは今みもとにまいります。わたしは彼らの中でわたしの喜びが全うされるために、世にあってこれらのことを話しているのです。

（ヨハネ　17・13）

イエス様ご自身がかつておられた天における居場所、父のみそばに戻ることのできる喜びです。けれども、それだけではなく、イエス様は、本当はご自分の苦しみによって多くの人々が義と認められる、贖われることを喜びとしておられたのではないでしょうか。

彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。（イザヤ　53・11〜12）

「彼」とはイエス様のことです。イエス様は十字架の激しい苦しみの後を見て満足されたのです。それは、多くの人々に救いと霊的祝福を与えることができるという喜びがあったからではないでしょうか。ですから、はずかしめをものともせずに十字架を忍ばれたのであります。ユダヤ人指導者に打たれ、あざけられ、そしてローマ兵士によって鞭打たれ、あざけられ、ついに十字架刑に処せられました。十字架につけられている間もあざけりを受けられました。これらを、天にある喜びのゆえに耐え忍ばれたのです。そして、イエス様は永遠の救いのわざを成し遂げられ、神の御座の右に着座されました。

イエス様はご自分の悲しみと苦しみが、やがて喜びと栄光に変わることをご存知であり、その喜びのゆえに十字架を忍ばれました。そして、最も高い次元の喜び、即ち、天の御父からの喜びを求めておられたので、苦しみに耐えることがおできになったのではないでしょうか。

苦しみの中にある喜び

信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。（ヘブル　11・24〜26）

モーセは、エジプトの王女に拾われ、その子どもとして育てられました。しかし、彼は、成人した時、その身分、特権、財産を捨てて、神の民のために苦しむことを選びました。モーセはエジプトの与えるこの世の喜び、エジプトから受ける宝を捨てました。そして、「報いとして与えられるもの」、つまり、神がくださる喜び、天の大きな宝に目を留めることによって、その苦しみを耐えたのです。モーセはイエス様の型です。モーセはイスラエルをエジプトの奴隷から解放しましたが、イエス様は、私たちを罪の奴隷から解放してくださいました。ローマの十字架刑は奴隷に対する刑罰でした。イエス様は、いわば奴隷として十字架にかかってくださったのです。みずからを奴隷の立場に置くことによって、人類を罪の奴隷から救われたのであります。ローマ市民であるパウロをはじめ、弟子たちの多くも十字架にかけられたと伝えられています。彼らは、ローマの市民であることより、神の国の国民であることを喜び、殉教していきました。イエス様ご自身と、イエス様に従った人々も、モーセのように、この世の喜びを捨て、天の喜びを仰ぎ見たのです。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。（ヘブル　12・2〜3）

あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。キリ

ストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。（1ペテロ　2・21〜23）

聖書は苦しみの中に喜びがあると教えています。しかし、その喜びは、イエス・キリストが私たちの罪のために苦しみ、死んでくださったことを知り、信じることなしには、得られるものではありません。私たちが苦しみや試練の中にいるときに、イエス様が私たちを支えてくださいます。イエス様にこそ、私たちは目を注ぐべきです。

イエス様が、救いの創始者であり、私たちに主なる神への信仰を生み出してくださいました。それだけでなく、イエス様は信仰の指導者であります。私たちはイエス様を信じ、イエス様の道に倣っていく者です。そして、イエス様は「信仰の完成者」であられます。十字架の道を全うされ、三日目によみがえられ、天に引き上げられました。このイエス様から、「目を離さないでいなさい。」と書かれています。つまり、私たちの注意を逸らすものが、至る所にあるということです。サタンはいろいろ巧妙な形で私たちの目をイエス様から逸らそうとします。私たちが試練や困難、また迫害を受ける時、イエス様を見上げましょう。主ご自身が、極限のはずかしめをお受けになられました。このイエス様が、今、私たちの信仰を完成してくださいます。私たちも、この方にならって天における報いを待ち望むなら、今の苦しみを甘んじて受けることができるのではないでしょうか。

ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。（コロサイ　1・24）

教会とは建物のことでも組織のことでもありません。イエス様のみからだであります。パウロは、その教会のために受けている苦しみを、「私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。」と語りました。これは、キリストの十字架の苦しみが不十分であって、救いが完成されていないから、救いを補うために何かをしなければならない、という意味ではありません。

イエス様は、十字架の上で「完了した。」（ヨハネ 19・30）と宣言されました。私たちの救いは、十字架の死によって完成しています。しかし、イエス様は、十字架による救いをこの世の人々に伝える使命、すなわち福音を宣べ伝える働きは、教会に属する私たちにゆだねられ、天に戻られました。欠けているのは、キリストの無限に価値のある苦しみが、十分には世に知れ渡っていないことではないでしょうか。

喜んで福音を宣べ伝える

福音を伝える働きには、しばしば困難や苦しみが伴います。これが、「キリストの苦しみの欠けたところを満たしている」と書かれてある意味ではないでしょうか。

しかし、パウロはここで、たとえ困難があり苦しいことがあったとしても、福音を宣べ伝えるという働きを喜んで行なっている、「あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。」と語っているのであります。イエス様がご自分の前に置かれた喜びのゆえに十字架を忍ばれたように、パウロはイエス様に倣う者として、喜んで福音を宣べ伝えたのであります。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。（1コリント　1・21〜24）

私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。あなたがたこそ私たちの誉れであり、また喜びなのです。

（1テサロニケ　2・19～20）

パウロは、テサロニケの人たちが自分たちの冠だと言っています。これは、苦闘の中で宣べ伝えた福音によって、テサロニケの人たちが信仰を持ち、愛と希望に満たされて生きていたからです。彼らのことを見ると、主が豊かに報いてくださるという慰めと希望が与えられたのです。それゆえ、パウロは、彼らのことが誇りであり喜びであったのです。ペテロも同じように証しし、キリストの苦しみにあずかれることを喜びました。

信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。

（1ペテロ　1・7～8）

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。

（1ペテロ　2・9）

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。

（1ペテロ　4・12～13）

復活されたイエス様は、弟子たちに現れてくださり、次のような言葉を残して天に昇られました。

わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。

（マタイ　28・18～20）

イエス様は弟子たちだけでなく、現代の私たちにも同じように語っておられます。主の再臨が間近に迫っている今日、私たちも、贖われた者として、イエス様が辿（たど）られた十字架への道をいつも覚える者でありますように。そして、ペテロやパウロのように喜んで主を証しする、主を紹介する者でありたいと願っています。主はいつも私たちと共に歩んでくださいます。

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨てておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。

（詩篇　16・8～11）



黒田禮吉（吉祥寺集会）

十字架への道

神がこのことをされたのだ

宇田川 ゆかり



後列左がゆかりさん、長女の静さん、前列左から夫の直樹さん、長男の望さん

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。

（詩篇103・1〜5）

私が初めて聖書にふれたのは、幼稚園のときでした。教会が運営している幼稚園に通っていましたので、主の祈りを暗唱したり、クリスマスには降誕劇をしたりしていましたが、救いも何も分からないまま卒園しました。

私が、主イエス様に出会ったのは、結婚を通してでした。夫の直樹兄とは同じ会社でしたが部門は違っていました。入社三年目の一九九三年、私は宣伝部に異動になりました。異動後すぐに、半年後に行なわれる会社主催のトライアスロンのミニレースに担当部署の者として出場するように、と上司に言われました。競技の経験はまったくありませんし、レース用の自転車すら持っていないので困っていると、隣の席の先輩がトライアスロン部のマネージャーをしていたため、すぐに会社のトライアスロン部の練習に参加できるようにしてくれました。そこで、直樹兄とチームメイトとして関わりをもつようになりました。私たちは、お互い苦手な相手でした。しかし、地方のレースに参加するため、たまたま私を車で迎えにきた直樹兄に会った私の母は直樹兄をとても気に入り、「こんな人と結婚するといいのに」とよく言うようになりました。

一九九五年の夏過ぎに直樹兄のお母様が病気で入院していることを聞いてから、わたしの直樹兄に対する気持ちは、少しずつ変化していきました。その年の秋、チームメイト数人と遊びにいった帰り道、直樹兄が車で私を家まで送るというので、めずらしく一緒に帰ると、おつきあいもしていないのに、突然プロポーズをされました。私は、結婚は自分の一生を預けることだから、相手は慎重に選択しなければならないと思っていました。しかし自分でも不思議なほどに何の迷いもなく、突然のプロポーズに「はい」と即答してしまい、そんな自分にとても驚きました。

イエス様が背後で働いてくださったとしか思えません。プロポーズの後、直樹兄から母である淑子姉妹が末期がんで年が越せないので、自分は違うが両親はクリスチャンだから、一か月後に宣教師の方に来てもらい病室で簡単な結婚式を挙げたいと言われました。両親に相談すると、父は事業をしているため、年が明けて落ち着いたら関係者を呼んで披露宴を行なってほしいが、結婚式は淑子お母さんの一番良いようにしなさいとすべてを受け入れてくれました。

そして一か月後の十一月三十日、病室での簡単な結

婚式の予定が、東海大病院の会議室での結婚式へと導かれていきました。淑子姉妹から、結婚式の前にベック兄に挨拶に行くように言われ、二人で家庭集会に行きました。ベック兄は神様の話をされましたが、私は、なぜ結婚の挨拶に来たのにこんな話を聞くのだろう、と思うばかりで何も頭に入りませんでした。しかしそのあと直樹兄は突然、救いの確信をいただき、救われました。

東海大病院での結婚式は、本当にたくさんの祈りに支えられ、主がすべてを整えてくださいました。淑子姉妹は、結婚式の一～二週間ほど前からモルヒネのために錯乱状態となり面会謝絶でしたが、結婚式の前後三日間だけは守られ、二時間にもわたる結婚式の間、車いすに点滴をつけて出席し、出席者への挨拶ではなく、主イエス様に感謝の祈りを捧げました。

淑子姉妹は、結婚式の二週間後に召されましたが、姉妹が召される日、私はちょうど会社の休みをとっていましたのですぐ病院に駆けつけることができました。このことを通して、人が召される時はすでに決まっているのだと思いました。私は、イエス様を知らない者でしたが、結婚から淑子姉妹の昇天を通して確実に何か大きな力が働いていることを強く感じました。しかしそれがなぜイエス様なのか？他の神様ではないのか？が理解できませんでした。

一九九六年三月、会社を退職し、所沢の直樹兄の実家で、父と同居しながら結婚生活がスタートしました。結婚前に救われイエス様を第一に生活しようとする直樹兄とこの世の楽しみを満喫したい私には一致がなく、幸せな結婚生活を期待していた私は、分かり合えないさびしさに毎日泣いてばかりいました。

日曜日に礼拝に連れていかされると、信じていない自分がこの場所にいてはいけないように思え、集っている方々と一つになれないままその場にいることがとても苦しく、自分がイエス様を信じられたらどんなに楽だろう、夫と一緒に喜んで礼拝に行けたらどんなに良いだろうと思いましたが、自分に嘘をついて信じたふりをすることもできず苦しみました。聖書について多少理解できることはあっても、自分の力ではイエス様を信じることができませんでした。

> 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。
>
> （2コリント　6・14～15）

夫婦の不一致の苦しみは大きなものでした。その原因は直樹兄がイエス様を信じたせいであると思うようになった私は、イエス様を激しく否むようになりました。集会に行かされることも、食事の前に一緒にさせられる祈りも苦痛でした。集会にも行きたくないし、イエス様という言葉は一切聞きたくないと思いましたが、そのことを直樹兄に伝えることができずにいました。

私がそのような思いの中で限界に達したとき、長男を妊娠し、つわりがひどかったため集会にも行けなくなりました。食事も食べられなかったので、食事の前にともに祈ることもなくなりました。イエス様は、押し付けられていると私が感じているものを、本当に自然な形でとりさってくださいました。

集会に行かなくなって半年ほどたった後、イエス様は、私に直接働いてくださいました。私は大きな悩みを与えられました。何でも自分の思い通りにうまく立ち回ってきた私は、自分の力ではどうすることもできないことを初めて経験しました。直樹兄に相談すると、「僕にはどうしたらよいか分からないから、イエス様に祈ってごらん」と言われました。「イエス様」、久しぶりに聞く言葉でした。祈ったらどうなるのか、

私は試す気持ちでイエス様に祈りました。

イエス様はすぐにそんな私の祈りに答えてくださり、想像もつかない方法で、誰の力もなしに、あっという間にその問題を解決されました。その見事な解決方法と、主がされることの完全さを見たとき、それまでの出来事のすべての背後にはたくさんの祈りがあり、だからこそ集会の方はすべてがイエス様によるものであると確信をもって言っていたのだ、ということがはっきり分かりました。イエス様が直接、「わたしが主である。他に神はいない」と語ってくださったのです。

あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。（ヨブ　42・2、5〜6）

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。（エペソ　2・8〜9）

イエス様は、私の家族に対しても豊かに働いてくださいました。私の母は二〇〇九年に脳出血で突然倒れ、二〇一一年に召されました。母が倒れたときにこのみことばをいただきました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

母が元気なころ「あなたのおじいちゃんは、聖書はすばらしいとボロボロになるほど聖書を読んでいた人だったし、あなたの結婚式や洗礼式で御代田に行ったりしたけど、私は信じることができなかったわ」と話してくれたことがありました。母は、二度の脳出血を起こし寝たきりとなりましたが、直樹兄が聖書の話をしてお祈りをすると目から涙が流れました。寝たきりであっても霊は聞いていて、母は、病を与えられてやっと、イエス様の救いをいただいたのだと確信しました。

また私の父は、母を見送った後にすい臓がんが分かり、二〇一四年に召されました。父は、母が死んでどうなったのか知りたい、と浦和の家庭集会に導かれベック兄と交わりました。私は、聖霊が父の上に働いてくださいと祈っていました。交わりの後、父は、「ベック兄といっしょに悔い改めの祈りをしちゃったよ。今まで霧がかかっていたのが一気にとれたようなすっきりした気分だ。心はキリストだ」と喜んでいましたが、日々の生活の中で、その喜びから離れてしまいました。

二〇一三年に父にすい臓がんが与えられてから、私は父とかかわることが多くなりました。小さい頃からお父さん子で父が大好きでしたが、母の入院生活を通して父とぶつかるようになり、隠されていた父の問題が明るみに出されてからは父をさばくようになりました。父にきつい態度をとることも多く、父を赦せない思いや悲しい思いなど、コントロールできない自分の感情の中で苦しみました。

「イエス様なら父に対してどうしますか？私は苦しくてもう耐えられません。私の思いはどうでもいいので、イエス様ならどうするのか教えてください」と祈りました。数日後、父の診察の日、重い気持ちで朝食の席につきました。直樹兄が朝の祈りの中で、「今日、ゆかりは病院ですが、病気のお父さんに寄り添うことができますように」と祈りました。そのときふとイエス様の答えはこれですか？十字架につけろと言った私たちに、「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしている

のか自分でわからないのです。」(ルカ 23・34)と言ってくださったイエス様は、こんなどうしようもない罪人の私たちにいつも寄り添ってくれる方であったではないかと思いました。

でもそれは私の力では、できないことでした。今までのことを忘れて父と寄り添うことは自分にはできません。でもみこころですから主が必ずそれをなしてくださるから感謝です。よろしくお願いしますと祈りました。父の病状がだんだん進み、私は毎日介護のため実家に通うようになりました。ある日実家に行くと父は動けなくなってベッドで倒れていました。倒れている父を発見したとき自分のなかにあった、いろいろな感情が主によって取り去られていったのを感じました。私自身の罪にも光をあててくださり、私も父とまったく同じ罪人であることを、イエス様はみことばをもって示してくださいました。それまでは、父の救いを願いながら、感情に邪魔されたためか、心から祈ることができなかったのですが、父が救われて重荷をおろせるように、と心から祈れるようになったのです。そして、私の中におられるイエス様ご自身が病の父に日々寄り添ってくださいました。

この頃から直樹兄がお見舞いに行くと、父の方から聞いてきて、直樹兄は聞かれるままにイエス様の話をすることができ、一緒に祈るようになりました。帰るときには父から、お祈りして今日はもう帰りなさいと言ってくれるようになりました。

ある日、父に「イエス様がパパに必要なことばをくれるから一枚ひいてみて」と、みことばカードをひかせると、「釈迦か、空海か、イエスキリストなのか？なにが神様なのか判断してやる」と言いながら父がひいたみことばは、「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」(使徒 4・12)でした。父は苦笑いしていましたが、みことばはいつも生きて働いておられます。

病状がさらに進み、緩和病棟への入院を勧められましたが、父は入院を拒否し自宅に帰ってきてしまいました。「帰ってきちゃったよ」と父が電話をしてきたので、「私が天国にいくまで面倒みるから大丈夫だよ」と伝えると「ありがとうな」と父は答えました。それから私たち家族は、全員で実家に移動し父と共に過ごしました。本当に祝福のときでした。

ある日父は「ゆかり、分かったよ。イエス様はいつもここにいる。もう何も怖くないよ」と嬉しそうに話してくれました。「パパがベックさんと一緒に悔い改めのお祈りしたときから、イエス様はずーっとパパの心の中に住んでいるんだよ」、そう伝えると「そうだったのかー」ととても嬉しそうな顔をしました。父ははっきりと救われ、天国の希望をいただきました。それからの父はいつも平安で満たされていました。見舞いに来た未信者の上の兄も父の変化に気付き父の救いを確信しました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。(使徒 16・31)

イエス様はなんでもできる方であり、家族の救いは本当にすばらしい約束です。

二〇一七年の二月、息子の受験の真っただ中に、札幌に住んでいる直樹兄の父が召されました。夏頃から覚悟はしていましたが、受験のときは守られるだろうと思っていました。しかし主の御心は違いました。息子は受験よりも、札幌での葬儀に出席することを選びました。どうして？と思うことも後になってみるとすべてが主の最善です。

イエス様は日々さまざまな悩みや問題を通して、私たちがイエス様だけに信頼して歩めるようにと導いてくださっています。自分の考えや思いを捨ててイエス様

の導きだけを頼りとして、兄弟姉妹が一つになり、再臨のときまでイエス様につながっていたいと祈っています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

宇田川ゆかり
一九七一年一月一日　東京都中野区生まれ
東京都北区立　稲田小学校卒、東京都北区立　赤羽中学校卒、東京都立　豊島高等学校卒
東横学園女子短期大学　国語国文学科卒、日清製粉株式会社（退職）
夫・直樹（なおき）、長男・望（のぞむ）、長女・静（しずか）

主は私の羊飼い

飯島　未穂



左から未穂さん、娘の真珠さん、ご主人の修さん

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。

（1コリント　2・9）

私は二十七歳のときに仕事や夫婦のことで悩み、聖書に助けがあるのでは、と図書館で聖書を借りました。それまで聖書を一度も読んだことはなく、教会へ行ったこともなければ、イエス様のことはまったく知りませんでした。それから間もなく、近所の教会での音楽会の案内がポストに投函されており、夫と共に行きました。私たち夫婦はイエス様を信じるようになりました。イエス様の十字架の御業は私の罪のためと分かったつもりでしたが、本当の意味ではまったく分かっていませんでした。聖霊の働きも、再臨も知りませんでした。クリスチャンになれば善い人になれると思っていました。

その後、教会内で問題が起こり、たくさんの人と共に私たち夫婦も教会を去ることになりました。それから教会探しが始まりました。その頃、同じ教会だった婦人が家庭集会へ誘ってくれました。二〇〇一年二月一日、初めて学芸大学家庭集会へ集いました。覚えているのは、初めて聞く「キリストには代えられません」の讃美に涙が溢れてきたことです。私の思いと一緒だったからです。今まで行った教会とは違うものを感じました。ここに集いたいと強く思わされました。

祈り会にも加えていただきました。初めて集ったときに、家族の救いを祈りますから名前を教えてください、と言われびっくりしました。前の教会では救いを祈り合うことはありませんでした。実家には仏壇と神棚があり、毎朝お茶や炊き立てのご飯を供え、線香を立てて拝んでいる両親のことを考えると諦めに近いものがありました。しかし永遠のいのちをいただいて天国で再会できたなら、どんなに嬉しいか。そのときは夢のような話だと思っていました。集ううちに祈り会では、主を拒み、迫害や反発をしていた家族が救われていく様を見せていただきました。祈りは聞かれると知りました。

吉祥寺集会へ導かれてからは、実家へ行っても仏壇を拝むことをやめ線香をあげなくなりました。信仰のことで両親との関係は険悪となり、「もう来なくてもいい」と言われたこともあります。あるとき信仰のことで父と口論になってしまい、普段穏やかな父がとても怒り、口論は夜中まで続きました。その二日後、父は激しい腰痛のため起き上がれなくなりました。その後入院となりました。祈りつつ「光よあれ」をお見舞いに持っていきましたが、すぐに「いらない」と断られました。

でも、翌日お見舞いへ行ったときは、前日とは様子が違い、腰痛に加え激しい頭痛も加わり、弱り果てた父がベッドに横たわっていました。私を見て「昨日持ってきてくれた本（光よあれ）はある?」と弱々しい声で聞きました。「本はないけれど聖書はあるよ。読むね」と詩篇を読みました。イエス様が父の心を開いてくれたときでした。その後、腰の手術、リハビリと続き、お見舞いのたびにイエス様の話を聞くようになってくれました。退院後間もなくして快気祝いと称し、ドイツ喜びの集いにお誘いしたら了承してくれました。私の両親と夫の両親も一緒に行く恵みをいただきました。初めてベックさんとお交わりいただいた両親は、「未穂の信じている神様は本物かもしれない」と言うようになりました。その後、所沢家庭集会や御代田、大阪キャンプへも一緒に集いました。

その七年後の二〇一一年、両親はイエス様を救い主として受け入れ、口で告白し、御代田で私たち夫婦と共に洗礼の恵みに預かりました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」（ヨハネ　14・6）

その後主の訓練が始まりました。

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。（ヘブル　12・11）

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。（ヘブル　13・5）

10人の証し

Unser HERR lebt

ベックさんの著書「絶えず祈れ」には、「あなたは、攻撃され、非難され、不当なあつかいを受け、こばまれ、傷つくことがあるかもしれません。敵があなたをののしり、友があなたを見すて、ひとから軽蔑され、拒否されるようなことがあるかもしれません」という指摘が書かれていますが、そのことを私自身が体験することになったのです。

未穂さんは昔だったら追放されるほどのことです、という内容のことをある方から言われました。私は追放という言葉に耳を疑い、「追放ですか?!」と何度も同じ質問をしました。それからその周りの人からも不当なあつかいをされるようになりました。

私の心は怒りでいっぱいになりました。人が信じられなくなりました。それから人を恐れるようになりました。人の言葉、態度ですぐに不安になり、恐れ、孤独になる惨めな自分を見せられました。一日中不安で、夜中目が覚め暗闇の中で思い煩い、朝は不安で目が覚める、重苦しい、苦しみが長い間続きました。この場から離れたいと思うようになりました。

その頃、ある姉妹からホームスクールを紹介されました。子どもを学校へ行かせず、家で勉強させる在宅教育のシステムです。祈った結果、娘をホームスクールさせることにしました。娘の救い、親子関係が良くなっていくことが願いだったからです。会員になり必要な情報が得られ、勉強、運動面でもサポートが受けられました。子どもの救い、弟子訓練、世界宣教を目的とするものだったのですが、模範的なクリスチャンを目指そうと聞くたびに、私たちは模範から真逆な者たちでしたから次第に苦しくなっていきました。イエス様に拠り頼む信仰と、人の力で頑張る信仰、真逆な二つの信仰があるのだろうか?と疑問が起こり、信仰のことでも悩むようになりました。

イエス様へ祈った結果、はっきりとみこころがなされました。ホームスクールをしている姉妹から、「ホームスクールを希望している他教会の方が祈り会を求めている、どうでしょうか?(入れていいでしょうか)」と聞かれました。祈り会では、他教会の方々が来るのを疑問に思っている姉妹もいて分裂がすでにおきていたので、返事に困っていると、「未穂さんは祈り会へ来ないほうがいいのでは」と言われました。イエス様からの祈りの答えだと受け取りましたが、大変辛い体験となりました。安心して何でも話して、と言ってくれていた姉妹からも重荷だと言われ、避けられるようになりました。重荷にさせてしまったことは本当に申し訳ないと思わされ、イエス様に悔い改め、その方にも謝りました。

同じ頃、自営業の夫の仕事にも問題が起こり、家を失うことになりました。また、兄は信仰のことで、インターネットでの悪い噂を鵜呑みにし、激しく責めてきました。実家へ入れない時期も重なりました。兄と同居をしている高齢になった両親は、争いはいやだ、と信仰から遠ざかりました。どうしていいかまったく分かりませんでした。四方八方から責められてすべてがお手上げでした。恐れだけが私を支配し、目の前は真っ暗でした。

私の敵。私のことで喜ぶな。私は倒れても起き上がり、やみの中にすわっていても、主が私の光であるからだ。

(ミカ　7・8)

恐れのある日に、私は、あなたに信頼します。

(詩篇　56・3)

奉仕の中でも指摘されたことを素直に謝れないばかりか、疑問や不満を言ってしまいました。私の内側の汚いものをはっきり見せられました。イエス様に「憐れんでください。本当の奉仕とはどのようなものか、教えてください」と祈り求めているとき、ちょうどベッ

クさんがメッセージで、「多くの奉仕が主の妨げをしています」と言われていました。私のことだと思いました。

「神の愛」を読んでいるときに答えをいただきました。私は主のために何もできないばかりか、妨げしかできないことを知りました。しかし、私の中のキリストの御霊様は、どんなことでもできるお方だと知りました！喜びが与えられました。

苦しくて何度かベックさんとのお交わりもいただきました。ベックさんは「笑い話だよ。追放するとか出なさいとか言う人がいるから、今、集会はめちゃくちゃだよ。イエス様につながることが大切だよ。頭（かしら）なるイエス様につながることが大切だよ。批判されたり、攻撃がないのも寂しいよ」、「未穂が人を愛せるなら、イエス様はいらないよ～知らんぷりしていればいいよ」とおっしゃってくださいました。

ベックさんからも叱責や排除されることを覚悟していましたので、受け入れていただいた安堵と喜びでいっぱいになりました。すぐに、これがイエス様の御愛なんだと、はっとしました。涙が込み上げてきました。今まで大きな荷物を何年も背負い続け、苦しんできましたが、その重荷はごろっと落ちて軽くなりました。平安が戻ってきました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。
（マタイ　11・28）

ローマ人への手紙の「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。（ローマ 7・24）」のみことばの直後に、「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」（ローマ 7・25）と続きます。たった一節の間に大きな溝があり、以前は超えられなかったのですが、これまでの試練や苦しみを通してアーメンと心から言える者としてくださいました。

意識をしていませんでしたが、学び、努力、がんばる、善い人になる、という思いが内にあり、内住のイエス様の妨げになっていたことを気付かせてもらいました。

ベックさんが言われていた宗教と啓示の違い、イエス様と個人的に出会うこと、イエス様を知ること、ミンヘン姉妹がお証しされたオーガニゼイション（組織としての教会）とオーガニズム（主のみからだなる教会）の違いは、かつてはぼんやりとしかわかりませんでしたが、イエス様は私の心の目を開いて違いを教えてくださいました。「本物が欲しいです」と祈り求めた主からの答えでした。この大事なことをイエス様は私に啓示してくださるために試練や苦しみが必要だった、と今は思えるようになりました。私の内からは善いものは出ず、惨めなものしか出ない、ここを通してでなければ、宗教的なことから抜け出せなかったと思います。

上にあるものを求めなさい。・・・あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。
（コロサイ　3・1、2～3）

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。
（イザヤ 42・16）

最近、娘から集会へ集いたくないのはママがいるからだ、と言われました。自分の力に頼って頑張っている頃の私は、そのことばを受け入れることができなかったと思います。今は、そのような者でしかないと

そのままを受け止め、家族の救いを約束してくださり、娘を愛してくださっているイエス様におゆだねし、お祈りしています。

今でも訓練は続いています。見えるもの、聞こえるものに捕らわれることがあります。ある交わりの中で聞きました。自分の思いが強いと、みことばを塞ぐ。みことばは聖霊だから聖霊が働けなくなってしまうと。ああ、そうか、私の思いが強いせいで、みことばが入らないのだと知りました。

御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。（ローマ　8・13）

あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。（マタイ　16・23）

全き愛は恐れを締め出します。（1ヨハネ　4・18）

最後に洗礼のときにいただいたみことばを読んで終わらせていただきます。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ　2・20）

飯島未穂
一九六七年生まれ　埼玉県秩父育ち
聖徳学園短期大学家政学科被服専攻卒業
家族　夫・飯島修、娘・飯島真珠

あふれるばかりの主の恵み

喜屋武　昌信



妻の信子さんと

主なるイエス様は、飢え渇いていた私を、本当に不思議な方法で救いへと導いてくださいました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。（伝道者　3・11）

私は、一九三六年（昭和十一年）沖縄に生まれました。小学二年生のときに沖縄戦が始まり、父は本島南部で戦死しました。戦後は、母と妹、父の両親とともに新しい生活がスタートしました。戦後の生活はとても大変なものでしたが、それでもなんとか家族、親戚が助け合って暮らしていました。

一九六五年（昭和四十年）、妻信子と結婚し、四人の子どもにも恵まれ、私たちは、仕事や子育てに忙しい日々を過ごしていました。

私の母が体調を崩したのはちょうどそのころでし

た。戦争未亡人で苦労していた母を気づかって、教会クリスチャンだった信子姉の母が、教会に誘ってくれました。教会に通ううちに、母の病の原因も明らかにされ、次第に元気を取り戻していきました。

母が熱心に教会に集うようになっても、教員として毎日を慌（あわ）ただしく過ごしていた私は、神様には何の興味も示さずにいました。ただ、毎日家の片隅で静かに祈る母の姿に、何ともいえない安心感と、ひたむきに何かに必死で祈ることのできる母を、なぜかとてもうらやましく感じたことを、今でもはっきり覚えています。

望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。
（ローマ　12・12）

一九八六年（昭和六十一年）六月、私は仕事中に脳出血で倒れ、緊急手術で一命はとりとめたものの、右半身マヒの体になりました。今から三十年前の、五十一歳のときでした。順風満帆に過ごしていた毎日は一転し、真っ暗闇の中に突き落とされたようでした。

当時の不安や失望感、そして死への恐怖は、何事にもたとえようがありません。この不自由になった体を誰にも見られたくない、恥ずかしいと、日中は車椅子に座って、窓から道行く人をただ眺めていました。利き手にマヒが残ったため、左手で文字を書く練習も始め、日が暮れてから海岸で歩く練習を妻と共にする毎日でした。この体が元通りになるならと、病院を転々とし、倒れて一年後には、中国まで気功、ハリ治療に行きました。足は、杖をついて歩けるほどに回復していきましたが、それとは逆に、心はどんどんすさんでいきました。

イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。」
（ヨハネ　6・35）

心配した友人や知人にすすめられて、様々な新興宗教にも通いました。しかし、ひとつとして信じられるものがなく、ますます私の心は痛み、飢え渇いていきました。

このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。
（2コリント　12・8〜9）

私のたましいは、神を、生ける神を求めて渇いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましょうか。
（詩篇　42・2）

そのときはまだ、イエス様のことも聖書も知りませんでした。しかし、私のたましいは、生ける神様を求めていたのです。当時の私の日記に、次のように書かれていました。

「この現実から逃れることはできない。どんなにもがいても、どうしようもないことだ。それも運命だというのか。この厳しい試練の中でも何かを見つけたい。何を目標にして生きるべきか。本当に信じられるものがほしい。心の底から信じられるものが。」

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」
（ヨハネ　14・6）

あるとき、私はいつものように、部屋から外を眺めていました。しかしその日は不思議と、外の景色が違って見えたのです。太陽の光はまぶしく、庭の木々はざわざわと風で揺れながら木陰を作り、鳥や虫が気持ちよさそうに飛んでいました。道行く元気な人たちを、うらやましく思いながら眺めていた風景は一変し、その日から、自然界の神秘さに心を奪われていったのです。この完璧な世界、大宇宙は人には造ることはできない。これは神様が造られたのだ。神様のご臨在を確信した瞬間、失望感でいっぱいの私の心に、なんとも言えない喜びが湧き出てきました。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。（ガラテヤ　1・12）

しかしそのときはまだ、その「神様」は漠然としたもので、ただ大きな存在があるという確信だけでした。

初めに、神が天と地を創造した。（創世記　1・1）

それから間もなく、職場の同僚から、「私の集っている集会に、ベックさんというすばらしい方がお見えになるから話を聞きにいこう」と誘いがあったようです。妻は「うちの人はこの世の神様というものに裏切られてばかりいるので行かないと思うよ」と答えたそうですが、なぜだかこの日は「退屈しのぎに行ってみようか」という思いになりました。それは主の導きでした。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

ベック兄は、私たち夫婦のためにお交わりの時をつくってくださいました。イエス様の福音を聞き、ベック兄のお祈りに続いて、初めて悔い改めの祈りをしました。その瞬間、肩から重荷がすっと抜け、何とも言えない平安な気持ちに満たされました。私が心から信じられるもの、頼れるものが欲しいと探し求めていたのは、道であり真理でありいのちであるイエス様だったのだ、と確信できたのです。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。（イザヤ　38・17）

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。（ヨハネ　1・12）

私と妻は、イエス様を信じ受け入れました。あれほど病気を治すことに必死になっていた自分が、体のことはどうでもいい、と思うようになったのです。私はこの病気のおかげで、イエス様を知り、不安と死の恐怖から解放されたのです。

もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。――主の御告げ。――（エレミヤ　29・13～14）

それ以来、私の生き方はまったく変わりました。一日の大半を、聖書を読んだり、みことばのテープを聞いたりして過ごすようになりました。人前に出ることを避けていた私が、日曜日に集会に集うのが楽しみになり、たくさんの兄弟姉妹との交わりを通して、病が与えられたことをありがたいとさえ思うように

10人の証し　Unser HERR lebt

なりました。すべてがイエス様のご計画であって、私の探していた答えがすべて聖書の中にあったのです。本当に不思議なことです。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。
主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。
主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。
たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。
私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。
まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

（詩篇　23・1〜6）

私が集会に集うようになったころは、首里の小さな一軒家で礼拝が行われていました。そこは大変狭く、兄弟姉妹が増えていく中、たくさんの方々が一緒に集うことができ、納骨堂も造れるような広い場所が与えられますようにと、日々みんなで祈っておりました。
ちょうどそのころ、私に管理を任されていた土地に建っていた、ルーテル教会の牧師さんから、「新しい場所に教会を建て直すことになり、この建物は別の目的で使用したい。それがだめなら、建物を買い取ってくれませんか」と相談がありました。この教会の信者の方々は、ほとんどが米軍基地の関係者とその家族でした。沖縄に基地がある間は借りたいということでしたので、当分は還ってこないものと諦めていましたので、その申し出に大変驚きました。
ずっと集会所を探して祈っていたこともあり、すぐにベック兄に相談いたしました。ベック兄は「沖縄集会のために祈りましょう」とおっしゃってくださいました。私たちもさらに祈り続けました。それからしばらくして、沖縄集会の兄弟姉妹、さらには全国各地の集会から献金が集まってきたのです。それは、建物を集会で買い取るのに十分な金額になっていました。

また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。

（ピリピ　4・19）

主は、私たちの祈りを聞いてくださるだけでなく、生きて働いてくださるお方であると確信しました。本当に感謝であります。
与えられた集会所は、教会として使われていたこともあり、室内は広々とし、車イスでも出入りできる入口もあります。さらには、納骨堂として使用できる部屋もあり、私たちの必要がすべてそなえられた場所でした。たくさんの兄弟姉妹の祈りと、恵みの大きさにただただ感謝する毎日です。
一つひとつの患難も、すべてを恵みに変えてくださる主は、本当にすばらしいお方であります。これからも、主に信頼してすべてをゆだね、主に向かって祈り続けていきたいと思います。

神は大いなる事をなして測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない。

（ヨブ　5・9）

喜屋武昌信（きゃん　しょうしん）
一九三六年　沖縄生まれ。
コザ高校。琉球大学教育学部卒。
妻　信子（のぶこ）。子ども一男三女。

10人の証し

Unser HERR lebt

主の愛に包まれて

喜屋武 信子



前列左から夫の昌信さん、信子さん、後列左から三女の津波倫子さん、ご主人の隆之さん

一九三七年、私は、南米ペルー国のリマで生まれました。そのころの沖縄は、生活が苦しく、若い人たちは移民として外国へ出稼ぎにいくようになっていたそうです。父も、母と姉二人を沖縄に残して、単身でペルーに移民しました。父は、自分で店を経営しながら必死で働き、七年後に母をペルーへ呼び寄せました。そこで、二人の兄と、私、弟の四人が生まれました。一番上の兄は、幼いころ病気で亡くなり、私が四歳になったころ、母は私たちを連れて沖縄に帰ってきました。

そのころペルーには、日本人学校がなく、私たちの将来のことを考えて帰国を余儀なくされたようです。沖縄に帰った私たち兄弟は、ちゃんとした日本語も話せず、生活習慣の違いや、色々な面で母も同様に大変苦労したそうです。そんな苦しい中、母は、夜な夜な色々な話を聞かせてくれました。私たちが生まれたとき、現地で滴礼を受けたこと。イエス様はすばらしい神様で、私たちをいつでも守ってくださっている方だと教えてくれました。

大変な中にあっても、イエス様の話や、母の祈りが、私たちを支えてくれていたのだと思います。イエス様は、私が神様を知る前から、私たちを愛してくださっていました。まさに神様のあわれみであります。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

一九六五年、結婚して四人の子供に恵まれました。主人は中学校、私は小学校で勤務しており、仕事と子育てに忙しい毎日でしたが、同居していた姑（しゅうとめ）、義妹に助けてもらいながら、とても充実した日々を送っておりました。そんなさなか、主人の母が体調を崩し、大変心配しましたが、私の母や弟が通っていた教会に導かれると同時に、姑の病もどんどん回復に向かっていきました。母や弟、姑も何かあるごとに、とても熱心に祈っていましたが、私たち夫婦は、心配事が取り除かれたあとは、以前と変わらず、毎日の生活に追われながら過ごしていました。

一九八六年、授業中に、緊急の電話が入り、主人が勤務先で倒れたと知らされました。私は急いで病院へと向かう中、初めて、「神様、どうか主人を助けてください」と、ただ夢中で祈っておりました。母から、毎晩のように神様の素晴らしさを聞かされ、神様の存在を知っていたはずなのに、心から「神様！」と叫んだことがなかった自分を情けなく思い知らされました。

私は苦しみの中に主を呼び求め、わが神に叫んだ。主はその宮で私の声を聞かれ、私の叫びは、御耳に届いた。（2サムエル　22・7）

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。（詩篇　50・15）

主人は意識を取り戻しましたが、右半身が麻痺（まひ）し、顔もゆがみ、何か必死に話そうとしても、ろれつが回らず、言葉も聞き取れない状態でした。退院してからは、主人の身の回りの世話をしながら、仕事や子育てに追われる毎日でした。主人は倒れた当時五十一歳でした。子供たちが不安にならないように、私は家族の前では明るく振る舞い、一人になると、この先の漠然とした不安に涙があふれました。

私が苦しみの中を歩いても、あなたは私を生かしてくださいます。私の敵の怒りに向かって御手を伸ばし、あなたの右の手が私を救ってくださいます。

（詩篇　138・7）

そのときの私は、自分の力で家族を守らねばと、必死にもがいておりました。主人が倒れたと知り、当時、教会に通っていた弟が、主人の身の回りの世話や、リハビリの手助けをしてくれたことは、本当に慰めでありました。母と弟は、私たち家族のために祈ってくれていました。

したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。（ローマ　9・16）

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

（エペソ　2・8）

ベック兄と出会い、主人がイエス様を信じるようになり、集会に集うようになってから、私たち家族の日々はすっかり変わりました。毎日車いすに茫然（ぼうぜん）と座（すわ）り、体を治すことだけを考えて、色々な病院、ときには新興宗教にも通っていた主人は、別人のように明るくなり、聖書を読み、祈りの中に包まれていきました。子供たちにも、イエス様の話をするようになり、共に集会にも集うようになりました。不安でいっぱいだった私たちに、イエス様は平安を与えてくださいました。

暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。

（マタイ　4・16）

集会に集うようになって、三ヶ月ほどたったころ、「沖縄喜びの集い」で主人は洗礼を受けたいと言い出しました。「主人がこんなに喜んでいるなら」と、私も一緒についていきました。洗礼式の前、ベック兄から、私も受洗を勧められましたが、「私はまだ聖書のことも神様のこともちゃんと知りませんので、その資格はありません。もっと勉強してから受けます」とお断りしましたが、ベック兄は、聖書は勉強して分かるものではないことや、ただへりくだって神様を受け入れること、また、夫婦で受洗することの意義を丁寧（ていねい）に話してくださいました。ベック兄と話したあと、不思議に私は「こんな私でも受け入れてくださるならお願いします」と素直に答えていました。

あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。

（詩篇　4・7）

その次に催（もよお）されたキャンプでは、娘三人も受洗の恵みにあずからせてくださいました。最初は、「主人のために‥」と通っていた私も、しだいに、神様がとても大切な存在となっていきました。

いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。

（詩篇　36・9）